

Emily Dickinson の詩について

— 子供の声と大人の声 — (1)

石原敏子

Emily Dickinson は一筋縄ではいかない難解な詩人である。彼女の詩の難解さは、一つに詩の主題の多様性に由来している。更に、ある一つの主題に限って見ても、彼女のとらえ方は常に一貫して不変なのではなく、むしろ状況に応じて大きな振幅を見せるのである。まさに Helen McNeil が指摘する通り、Dickinson は “multitudes” であり、ある主題を提唱する詩があれば必ずそれを否定する詩も書いているという、とらえどころのない詩人である。⁽²⁾ この主題の多様性、視点の変化は、時間の経過とそれに伴う経験によるものもあるが、そればかりではない。大した時間的拡がりを見ないうちに、プリズムの如く彼女の心は揺れ動き、様々なペルソナの声を通して心のうつろいが丹念に映し出される。時には一篇の詩において複数の視点の揺らぎを観察する事ができる。多岐にわたるペルソナのうち、この詩人は子供のイメージを頻繁に用いている。このペルソナの純粹無垢をかくれみのとして、神の力あるいは自分を取り巻くあらゆる外在的な力の前においても、ひるむ事なく大胆に自己を提示するという、詩人が十九世紀半ばのニューイングランドという現実の世界では成しえなかった事を、詩作品の中で行なっているとは、多くの批評家の観察するところである。⁽³⁾ しかし Dickinson の「声」は非常に微妙で、こうした伝記的、或いはフェミニスト的観点からのみアプローチしていると、重大なメッセージを聞きおとしてしまう事にもなりかねない。この小論では子供のペルソナを用いた作品を数篇選び、各々の「声」に注意深く耳を傾けてみたい。

第一に取り上げるのは “Dust is the only Secret —” (153) である。⁽⁴⁾ ここで詩人は子供のイメージを用いて無垢の世界を作り上げているかの様に読める。しかしこの詩に現れるペルソナは純粹にこの世界の住人ではなさそうである。ペルソナの声の重層性のうちに秘められているのは何なのだろうか。

Dust is the only Secret —
Death, the only One
You cannot find out all about
In his “native town.”

Nobody knew “his Father” —

Emily Dickinson の詩について

Never was a Boy —
Hadn't any playmates,
Or "Early history" —

Industrious! Laconic!
Punctual! Sedate!
Bold as a Brigand!
Stillier than a Fleet!

Builds, like a Bird, too!
Christ robs the Nest —
Robin after Robin
Smuggled to Rest!

この詩のペルソナの声の特徴づけているのは、最終スタンザに現れる死に対する認識の仕方である。あたかも「死」が大人の世界とは関係のない出来事であるかの様に、子供のイメージを用いて描かれる。「死」は巣を守る親鳥であり、キリストがいたずらっ子としてやって来ては、ヒナとしての人間を奪って行くという見方である。巣の中にいるヒナは“robin”であると詩人は言うが、この鳥の選択は大いに意図的である。マザーグースの童謡を歌い育った読者には必らず“Who killed the cock-robin?”のエコーが聞こえるはずである。直接的に言及しているわけではないが、そのために却って、童謡そして子供の世界の雰囲気といったものが高められるのである。子供の世界である事を強調する事によって、死の恐怖を持たない純粋無垢な者はこの世における生をまるでゲームであるかの様に容易に受け容れ、そして死も遊びのレベルでとらえ静かに身を委ねる事ができると Dickinson は言いたいのであろう。こうした生と死の認識、受容の問題をこの詩人は別の詩において再び子供のイメージを用いて次の様に描いている。

Not in this World to see his face —
Sounds long — until I read the place
Where this — is said to be
But just the Primer — to a life —
Unopened — rare — Upon the Shelf —
Clasped yet — to Him — and me —

And yet — My Primer suits me so
I would not choose — a Book to know
Than that — be sweeter wise —
Might some one else — so learned — be —
And leave me — just my A — B — C —
Himself — could have the Skies — (418)

難しい本をいやがり簡単な絵本の方がいいとダダをこねる子供の姿が眼に浮かぶほほえま

しい作品である。しかし一見単純そうなこの詩にも、実はもう一人のペルソナが見えかくれしている。“I would not choose --”という非常に強い否定の意志を伴う表現は、第二の生の存在、そしてその魅力を十分に意識している大人からしか聞かれるものではない。そういった存在を知りながらもそれが手に入るかどうかは確信できないでいる。この不確かさから生じる不安から解放される事のない自己に対する憤りと、いささか諦めの気持のまじった「経験」の声である。ここには、垣根のむこうに咲くイチゴをつんでごらんと神に挑戦した少女の「無垢」はもはや見られない(251)。

考えてみれば、マザーグースの童謡も決して「無垢」の世界ではないという事実は今更ここで論じるまでもないだろう。このマザーグースの闇の部分を意識しながら、もう一度“Dust is the only Secret --”を読み返すと、ペルソナのもう一つの声が響いてくる。キリストのイメージについて考えてみたい。他のいくつかの詩において全能の神の行為を「盗み」としてとらえ、“Banker, Burgler”と呼ぶ Dickinson であると理解してはいても、巣の中に生命を保持する死と対照させて、キリストを「盗人」として提示される時、読者はやはり感情的に納得できないものを感じざるをえないのではないだろうか。

墓場を巣、或いは憩う場とする見方は格別なものではなく、141番にも見られる。しかし少年はそこへ、近づこうとはしない (“where schoolboy dare not look”)。ここで注意したいのは、これと非常に類似した表現が、同年に書かれた別の墓 = 巣の詩(145)にも見られるという事実である (“Nor any schoolboy rob the nest”)。墓 — 巣 — 子供によるヒナ盗み、というこの連想が次の年(1860年)に書かれた“Dust is the only Secret --”にも現れたのであろう。こういういきさつからすると、キリストをヒナを狙ういたずらっ子としてとらえる Dickinson のメンタリティも十分理解できよう。

しかしながら、どうも気にかかるのは“smuggle”という単語である。第3スタンザに用いられている“Brigand”及び“Fleet”のイメージから、また第1、第2スタンザの「どこかよその国の身許不明の者」という内容からすると、「密輸入する」というこの語が使用されるのは当然とも言えよう。そして有無を言わさぬ死の攻撃に対抗するには、これ位の暴力的な力が必要であるのかもしれない。しかしそれにしても「不法性」のニュアンスを強く持つという点で、この“smuggle”という語はキリストの救済という聖なる行為を冒瀆する様な響きを余りに持ちすぎてはいないか。更に聖書においては、“robin”はキリストにさきつたいばらを抜き取ろうとした鳥でもあり、立場が逆になってはいるが、再生を想起させる場面にはふさわしいイメージである事も忘れてはならないだろう。こうして神聖さが強調される一方で、この語にもアンチ・クライマックス的要素がひそんでいるのである。意地悪く読めば“robin”は“robbing”との pun であり、本来神の所有物である人間を不法に奪い去った死と、キリストとを同レベルで扱う事になる。⁽⁶⁾ 従って、この“smuggle”という言葉を一語口にした途端、信仰心に満ちた純心なペルソナとしての子供は、一転して救済に対する不安をおし隠そうと

する大人の意識を露呈する事になる。

死を単なる事実として受容するか、或いは怖れるべき対象とみなすか、死に対する認識の揺れを子供の立場対大人の見方の混成によって複眼的にとらえている別の例は、David Lodge も指摘する467番である。⁽⁶⁾

We do not play on Graves —
Because there isn't Room —
Besides — it isn't even — it slants
And People come —

And put a Flower on it —
And hang their faces so —
We're fearing that their Hearts will drop —
And crush our pretty play —

And so we move as far
As Enemies — away —
Just looking round to see how far
It is — Occasionally —

墓場が遊び場として不適切であると不平を述べる子供の論理の背後には、死をも遊びのレベルでとらえてしまう無邪気さが窺われる。しかしこの様に遊びの愉しみだけを求めている、純真そうに見える子供達も、最終スタンザでは全く異なった形相を見せるに至る。彼らは墓場では遊べないと墓から離れて行くのであるが、その走り方には異様な恐怖感がただよっている。41番には美しい小枝を盗んで森から走って帰ってくる少女がいる。相手を信頼して、その宝物をおしげもなく与える森 (“trusting Woods”, “unsuspecting Trees”) に対する子供の勝利感、得意気な走りに対して、467番の子供達はびくびくと怯えながら何度もうしろを振り返っては、自分の安全を確かめる。子供にとっては恐れるべき場所でもなんでもないはずなのに、最終スタンザでは墓は “Enemies” としてとらえられている。そこから走って逃げたい衝動に駆られるのは、死とのつかまえっこ (prey-play) に没頭できない大人だけである。

大人が死を超越した immortality の状態を希求して止まないのは、自己の肉体的存在を意識することのない子供に対して、その限界を痛感しているからである。しかし皮肉なことに、immortality とは意識が肉体に束縛されている限り到達できるものではない。肉体的存在に対するあらゆる執着がなくなった時、自然とそれは訪れるものである。今まで肉体にまわりついてきた意識が解放され、自己充足の状態に至るのである。自己を変え様とする努力もそこでは必要でない。何のてらいも装いもなく、ただある自己を受容するのみである。

Dickinson のいくつかの詩が幼い読者にも好んで読まれるのは、ペルソナが変幻自在であり、子供の変身願望を満たすからであると Charlotte Downey は指摘している。⁽⁷⁾ この観察によると738番は児童用に編集される詩集に必らず収録されるべき詩と言えるかもしれない。

しかしこの詩が描くところはそれだけではなく、その伝えるメッセージは非常に深遠である。

You said that I “was Great” — one Day —
Then “Great” it be — if that please Thee —
Or Small — or any size at all —
Nay — I’m the size suit Thee —

Tall — like the Stag — would that?
Or lower — like the Wren —
Or other heights of Other Ones
I’ve seen?

Tell which — it’s dull to guess —
And I must be Rhinoceros
Or Mouse
At once — for Thee —

So say — if Queen it be —
Or Page — please Thee —
I’m that — or nought —
Or other thing — if other thing there be —
With just this Stipulus —
I suit Thee —

鹿やみそさぎいに、また女王に、おつきにと姿をかえるペルソナを「～ごっこ」遊びに熱中する子供と考える事もできるが、最後に用いられている“Stipulus”という語は完全に大人のものである。この成長した大人の声が伝えるところは、命ぜられるままに大きなもの、小さなものへと変身することができるとは、自己充足の状態にある意識を表わしているのであり、創造された自己をありのままに素直に受け入れることであるという点である。

更に Dickinson が“I’m that — or nought —”と言う時、子供をあやす「いない、いないパー」の姿かくしの遊びの延長と単純に考えられては困るのである。“You”の欲するままに生存したり無となったりするとは、“I have but the power to kill / Without — the power to die —”(754)に見られる、この詩人のもう一つの重要な宗教的テーマ、即ち自殺の問題とも深く関わっているのである。先に子供達が墓場から走り去って行く詩を読んだが、これらのペルソナが死を恐れるのは、彼らが他者 = ヒナを殺すことはあっても自分の命を断つことは禁じられており、従って死の前においては人間は全く無力であると知っているからである。

自身には一切の決定権を持ち合わさず、自分の存在、生、死を受け入れる決心を持った人間とは、Dickinson の描く、蜂の到来を待つ花の様に動揺することなく静かで美しい。

Spring comes on the World —
I sight the Aprils —
Hueless to me until thou come

As, till the Bee
Blossoms stand negative,
Touched to Conditions
By a Hum. (1042)

ここに描かれている花々は、蜂に触れられてはじめて蜜を産み出すのである。自身の蜜の甘さを誇示する事もなく、ただ選ばれるがままに身を委ねるのである。墓の中でその不安をおし隠しつつひたすらキリストによる救済を待ち望む駒鳥とは、明らかに姿勢が異なっている。ここの“stand negative”には、待ちわびるというニュアンスは全くなく、“smuggle”に潜んでいた痛みのかげもない。ここでは花々は蜂に刺されるよりも、むしろその奏でる軽やかなリズムに覚醒するのである。そしてこうした花の無執着の状態こそ、Dickinson の求めた自身の姿であったのだろう。それは子供の純心な無関心と通じるところがある様に思われるが、一たん大人の認識を獲得したものが子供の意識へ戻ろうとしてもそれは不可能である。ともすれば死の意識、肉体的存在意識が心の中に頭をもたげてくる。Dickinson の、子供のペルソナを用いた詩に、大人の声かふと聞こえたりするのはこのせいであろう。子供の無垢を失った瞬間に、そのエデンへ戻る道は閉ざされてしまったのである。新しく求めるべきエデンの園があるとすれば、それは、子供と大人の認識を超越したものであるに違いない。Dickinson 自身、この二つの認識に縛られながら、そこから新たな道を見つけ出そうと二つの極の間を常に彷徨し続けたのである。この忙しく左右に揺れ動く針が、ふと静止する瞬間こそ“negative flower”の状態であろう。この状態を獲得し保持するのが大いに困難である事は言うまでもないが、出来る限りそこへ接近しようとする努力、勇気にこの詩人の真剣さがうかがわれる。

To Be a Flower, is profound
Responsibility — (1058)

無垢と経験を超越しようとする葛藤の過程を追求して行くうちに、時として至福を得たこの詩人の声が、かすかに読者には聞こえて来るのである。

1. この論文は、京都女子大学山川瑞明教授の指導の元に月一回行なわれる Dickinson 詩の研究会において学んだ事をまとめたものである。参加者の方々、特に山川教授の適切な指摘に感謝の意を表したい。
2. Helen McNeil, Emily Dickinson. London: Virago Press Limited; 1986. p.12.
3. 例えば、Barbara Antonina, Clarke Mossberg等。両者による“Emily Dickinson’s Nursery

Rhyme” は、Suzanne Juhasz編 Feminist Critics Read Emily Dickinson. Bloomington: Indiana University Press, 1983 に収録されている。

4. 以下 Emily Dickinson の詩作品は、Thomas H. Johnson版から引用する。Thomas H. Johnson (ed.), The Complete Poems of Emily Dickinson. Boston: Little Brown and Company.
5. George H. Soule, Jr. も “Emily Dickinson and the Robin” において、この点を指摘している。 Essays in Literature 9 (Spring 1982), 78.
6. David Lloyd, “The Adult Voice in Dickinson’s Child Poems.” Dickinson Studies 49 (June 1984), 22 - 31.
7. Charlotte Downey, R.S.M., “Emily Dickinson’s Appeal for a Child Audience.” Dickinson Studies 55 (Spring 1985), 21 - 31.